

和敬清寂の侘び茶の世界

和敬清寂の出典

巨妙「茶祖珠光伝」1699年元禄12年頃

南宗寺の僧で武野紹鷗の外孫

I. 「利休に帰れ」の渴望

1. 元禄文化

頽廢的、大衆文化の成熟

元禄時代（1688-1704）前後、5代将軍綱吉の文治政治の下で、上方の町人を中心に繁栄した文化。貨幣・商品経済が発展、商人の台頭を背景に啓蒙と娯楽が求められ、遊里・芝居小屋も盛んとなった。北村季吟・松永貞徳らは古典研究によって旧来の知識を普及、貞門・談林の俳諧は庶民の実感をとらえ、松尾芭蕉は風雅の高みに達した。井原西鶴の浮世草子は好色・金銭を通じて世の人心を描き、上方の元禄歌舞伎は御家騒動で封建倫理を示し、江戸歌舞伎の荒事は東国の力を痛快に視覚化、大阪で人気を呼んだ。人形浄瑠璃は太夫・三味線・人形遣いの技能によって庶民層に浸透、いずれの文芸も滑稽味を含んでいる。なお、近松門左衛門の浄瑠璃や西鶴の男色物のテーマには封建社会下の忠義と私情の葛藤が見られる。

学問では林家の朱子学に対する伊藤仁斎の復古学、荻生徂徠の古文辞学、ほかに農学・本草学・和算などが発達。尾形光琳の屏風・工芸にみる古典的装飾美、京焼などの色絵の陶器・磁器、友禅染の衣装など遊芸を楽しむ生活が彩られる。以上のすべてに出版が関与し、浮世絵版画・絵本を含めて、かつてない情報文化が成立した。〈日本史辞典〉

2. 昭和の末から平成、令和の文化を考える

3. ソドム、ゴモラの文化

II. 家元制度の強化と侘茶

1. 三千家の侘茶

2. 「利休に帰れ」の四定 和敬清寂

3. 家元制度と十職

III. 侘び茶のコロナ対策

1. 和敬清寂

一期一会と並んで知られている茶道の精神を表す言葉に「和敬清寂」がある。室町時代の茶道の師である村田珠光が創唱したといわれている。それが、武野紹鷗、千利休に受け継がれ、江戸の初期に人々によく知られる言葉になったと伝えられている。

角川茶道大辞典には和敬清寂について次のように記されている。

「茶道の実現しようとする四つの根本精神を四字に要約したもの。この四つが茶道の目標として、いつの頃から唱えられたかは明らかではないが、おそらく茶道としての自覚の高まった江戸前期からであろうと推定される。

和とはたんに仲良くするというだけでなく、主も客も個性を発揮して、それぞれ独立独歩の存在でありながら、しかも万人共通の精神的な基盤、すなわち仏性に帰一して、相互に二にして二ならずという不二一如の『一座建立』することである。敬とは主従・上下の秩序を重視したかつての封建道徳ではなく、主も客もみな仏性を具有する尊厳な人格であることを相互に認め合い、他の仏性に対して

合掌しあうことである。清とは感覚的に無垢清浄であるだけでなく、より以上に心を清め、この『円虚清浄の一心』から自由にはたらくことである。寂とは普通には静寂の意味であるが、茶道の目標としての寂はそれに尽きるものではない。一つには環境によって動揺させられることのない心の寂、寂然不動の心境の事であり、さらには円寂すなわち涅槃、大調和の世界のことである。『露地の一境、浄土世界ヲ打開ク』（南方録）というその浄土世界のことである。/芳賀幸四郎

ここではすべて仏教精神で説明されているが、私は、高山右近がそうであったように、キリストの光に照らして、和敬清寂の解説を試みてみたい。利休の侘び茶には、たしかに和敬清寂の精神が込められているが、それは聖書の中心思想でもあると私は考えているからである。

裏千家国際局監修『茶の湯の英会話』（淡交社）では和敬清寂は **Harmony, Respect, Purity, Tranquility** と英訳されている。英訳されると、キリスト教的背景があぶりだされてきて興味深い。

和=Harmony

調和である。人と人の調和が失われるとき、交流の断絶が生じる。調和された生き方を求めて人の心は渴いている。戦国の世は緊張が高まり、人と人の調和が保てなかった。その中で、茶事を通して和が求められていた。

今日の科学・経済至上主義は、急速に地球を崩壊させる危機に迫りつつある。これも、人の心が渴く大きな要因である。創造主と人間との断絶は、あらゆる面での調和を壊している。人の心は心を求めて渴いている。つまり、神と人との調和を求めているのである。今日でも茶の湯は、人と人との調和を求めてなされている。

敬=Respect

尊敬、敬意、畏敬である。

茶の湯は、敬神人愛の修道である。キリストは、聖書の中心は神を愛し、人を愛することであると明確に教えている。この二つが満たされない限り調和の取れた人格的な生き方はできないし、人の心の虚しさは埋められることはできないのである。

「イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くしてあなたの

神である主を愛せよ。』これが大切な第一の戒め^てす。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じように大切です。」(新約聖書/マタイの福音書 22・37-39)

清=Purity

清浄。

これは、庭・茶室・道具などの清浄だけではなく、身体の皮膚の内側に清浄が宿っていなければならないことを表してる。聖書においてもこの清さが求められている。

「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。」(新約聖書/第一ペテロ 1・15)

繰り返し述べるように、織田有楽斎は高山右近の高潔な茶の湯を評して「清めの病」を患っているといい、ロドリゲスは「高山右近は、神に祈るために茶室にのがれた」と記している。そう言わしめるほどに右近の茶は、神に倣う者としての修道の茶の湯であった。

寂=Tranquility

静寂。

茶の湯で大切なのは静けさである。静けさとは、人が神の存在を意識するとき^にに生じるものである。そして、生きることにおける寂……すなわち静寂は、神の前に自分がいかなる者であるかを知って、心の罪、汚れを悔い改めること。これこそが寂の姿といえよう。寂を知る人は、命の躍動を知る人でもある。静寂にこそエネルギーの始動が秘められている。

「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』」(旧約聖書/イザヤ書 30・15)

つまるところ和敬清寂とは、神を愛し、人を愛する調和のとれた精神である。その和敬清寂が最も具体的に表現される場は茶事である。人の心に丁寧にもてなす

心、それこそが和敬清寂ではないだろうか。戦国時代とそれに続く江戸時代の封建体制の中で、人々が茶道に異常なまでの関心を持つようになったのは、和敬清寂を求める人間の裸の心の渇きを表していると思えてならない。

日常生活で茶室に静けさを求めるとき、そこに神の声を聴く。そこにいる隣人の心に同調することで、日々新しい和敬清寂を体験するのである。

<「茶の湯の心で聖書を読めば」>

2. 自分をもてなす自服の茶

3. 高山右近の禁教令に伴う茶人の姿

結び

自服のもてなしの修道に恐れはない
愛の修道が希望をもたらす